

Variation in the expression levels of predictive chemotherapy biomarkers in histological subtypes of lung adenocarcinoma: an immunohistochemical study of tissue samples

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2017-03-20 キーワード: 作成者: 藤本, 雄一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2001998">https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2001998</a>

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 1829 号

Variation in the expression levels of predictive chemotherapy biomarkers in histological subtypes of lung adenocarcinoma: an immunohistochemical study of tissue samples

(肺腺癌の組織学的分類別における抗癌剤感受性予測因子の発現レベルの変化：組織サンプルを用いた免疫組織学的検討)

藤本 雄一 (ふじもと ゆういち)

博士 (医学)

#### 論文審査結果の要旨

本論文は抗癌剤感受性予測因子の発現レベルを免疫組織学的に検討した論文である。肺腺癌はしばしば複数の組織学的亜型から構成される。浸潤性腺癌は現在、国際肺癌学会、アメリカ胸部疾患学会、ヨーロッパ胸部疾患学会による包括的な分類によって、優勢な組織学的亜型をもとに分類されている。今回我々は、抗癌剤感受性予測因子の発現レベルとこの分類によって分けられた組織学的亜型との関連性を評価した。27人の肺癌患者の組織を用いて、excision repair cross complementation group 1 (ERCC1)、class III  $\beta$ -tubulin、thymidylate synthase (TS)、ribonucleotide reductase M1 (RRM1)、c-Met の発現を免疫染色で調査した。この新たな分類に従い、発現強度や分布から免疫組織学的 H-score を計算したところ、抗癌剤感受性予測因子の発現レベルは組織亜型によって変化した。TS と class III  $\beta$ -tubulin の発現レベルの H-score は solid-type のほうが lepidic-type よりも高かった。Solid 成分が優勢な腫瘍は solid 以外の成分が優勢な腫瘍と比較してより早期に再発する傾向がみられた。しかしながら、組織学的に優勢な組織の H-score は腫瘍の病期や全生存期間との関連はみられなかった。抗癌剤感受性予測因子の免疫組織学的 H-score は組織学的亜型と強い相関がみられた。Solid 成分を含む腫瘍は予後不良の傾向があるため、組織学的亜型別に抗癌剤感受性予測因子の発現を評価することは有意義であると考えられる。我々の論文は肺腺癌の新規組織学的分類別における抗癌剤感受性予測因子の発現レベルの変化を初めて明らかにした臨床的に意義のある論文である。

よって、本論文は博士 (医学) の学位を授与するに値するものと判定した。